長崎旧居留地東山手に建つ洋風住宅7棟の「アマ部屋」について

ON THE SEVEN BUILDINGS KNOWN AS “AMA-BEYA” OF THE WESTERN STYLE HOUSES
LOCATED IN THE FORMER FOREIGN SETTLEMENT OF EAST YAMATE IN NAGASAKI

謝 少 明*, 土田 充義**

Shaoming XIE and Mitsuyoshi TSUCHIDA

This paper focuses its attention on the existence of seven buildings known as “ama-beya” of the western style houses located in the former foreign settlement of East Yamate in Nagasaki. We survey the characteristics of “ama-beya”, and describe how Chinese advanced from Guangdong and Fujian into Oura, tracing the etymology of the word “ama”. For the twin reasons of the connection between those Chinese and the “ama-beya”, and the coexistence of rental housing with the “ama-beya”, we may conclude that Chinese were involved in the construction of the seven buildings.

Keywords: *Rented house, The activity of Chinese, Housekeeper, Guangdong, Makao and Portugal, Ama*
賃貸住宅、華人の活躍、家政婦、広東、マカオとポルトガル、アマ

1. 序

居留地及びそこに建てられた居留地建築に関する従来の研究は二つに分けられる。一つは建築の近代化過程に着目し、広範囲にわたる研究で¹⁾、もう一つは外国人居留地を中心にした研究で、その形成及び建築についての考察である²⁾。それらの研究によって、幕末から明治初期に至る居留地の様相が明らかとなっている。グラバー住宅、リンガー住宅などを中心とする幕末から明治初期にかけて現存する住宅群の遺構は日本に洋風化が導入される出発点に位置づけられ、高く評価されている。

1976年、九州大学建築学科をはじめ、長崎旧居留地の南山手及び東山手の広範囲にわたる実測調査が行われ³⁾、その成果の一つは、論文「長崎旧居留地東山手に建つ明治中期の洋風住宅について⁴⁾」に収められた。この論文の中に、東山手地域に残る洋風住宅7棟は、賃貸住宅として建てられたのではないかと指摘が初めて提起された。これらの住宅群はグラバー住宅など幕末から建てられてきた独立住宅とは異なる住宅として、明治中期の長崎旧居留地における住宅を研究する上で重要な位置を占めていることが指摘されたが、住宅7棟の建設背景について、この時点では、ヨーロッパ人の背後で活躍した華人によるものではないかといずれも推定に止まらざるを得なかった⁵⁾。それを実証するために、前稿では、実測データを丹念に

駆使し、住宅7棟のうち、9番、10番住宅に用いた物差及び出所を判明したことにより華人が住宅7棟の建設に関与したことを把握することができた⁶⁾。

本稿は切口を更に変えて、住宅7棟の「アマ部屋」の存在に視点を当て検討することにした。長崎旧居留地における洋風住宅の特徴として、「本屋及附属屋から構成され、これらを渡り廊下で結んでいる」ことは、すでに指摘されている⁷⁾。附属屋は主屋の後方に、横長の別棟として建てられているのが一般的で、敷地の関係上主屋に接続して横に建てられるものもある。附属屋の内部は3～4室から構成されて、その中の一室が台所で、もう一室が浴室、さらにもう一室には畳が敷かれ、使用人の寝室として設けられている(図7参照)。「土地の人々はこの部屋をさして、アマベヤと呼んでいる⁸⁾」ことは指摘されているが、幕末の華人の長崎進出のことから、恐らく華人の使用人を指す呼称ではないかと思われる。本稿では、調査の対象となった洋風住宅の「アマ部屋」について、今までにその存在が確認できたものの、実証するまでには至っていなかった。そこで「アマ」という語源を溯りながら、居留地住宅の附属屋(「アマ部屋」)更にその意味(華人進出との関連性)を明らかにし、史的評価を行うことを目的とする。

* 俣佐藤総合計画 工博

** 鹿児島大学工学部建築学科 教授・工博

AXS Satow Inc., Dr. Eng.

Prof., Dept. of Architecture, Faculty of Engineering, Kagoshima Univ., Dr. Eng.

2. 「アマ」の語源について

近代において、中国との関係が深い国々の言語の中に、「アマ」という発音の言葉が一体あったかどうかについては、ヨーロッパから東南アジアに亘って、言語の辞書を調べると、次の通りに見出せた。【ポルトガル語辞書】

ama = nurse (看護婦、保母)、housekeeper (家政婦、家屋管理人)、governess (女性教師)⁹⁾。

【スペイン語辞書】

ama = 1 主婦、奥様、女主、2 持ち主、女所有者、3 家政婦、女中頭、女将¹⁰⁾。

【英語辞書】

amah = ≪インド・極東≫ 1 子守、(特に) 乳母、2 アマ (阿媽)、お手伝い、女中 (maid)、[1839. <ポルトガル ama「子守女、女家庭教師」> 中世ラテン語 amma「乳母」、おそらくラテン語 mamma「胸」の転化]¹¹⁾。

【馬來 (マレーシア) 語辞書】

amah = (女) 中国人の乳母、中国人の保母、子供附の婦人 (中国人の)、中国人の子守、母 (タミール人用語)、阿媽 (アマ)、女女、女中、東洋人在留外国人家庭の保母、乳母¹²⁾。

【日本語辞書】

アマ = 東洋に在住する外国人に雇われた、中国人の女中。㊦ポルトガル語の ama が中国で阿媽となり、英語で amah になったものという¹³⁾。

以上の辞書から、英語、馬來 (マレーシア) 語及び日本語の語源には、「アマ」という言葉が元々なく、ポルトガル語及びスペイン語の語源には、家政婦の意味を持つ「アマ」という言葉が既に存在したことが感じ取られ、つまりポルトガル語の ama が中国で阿媽となり、居留地に在留外国人家庭の華人家政婦を指す呼称であったことは間違いがない。さらにこの言葉の地域性及び時代性を明らかにするために、中国各地の方言についても、調べることにし、次の通りに見出せた (図1)。

【広東方言辞書】 (広州、香港、マカオ周辺)

亜媽 = (ama 或いは amah とも発音する) お手伝いさん、看護婦、お母さん。

亞嬭 = 祖母、(母方の) おばあさん¹⁴⁾。

図1 「アマ」一語の分布

【閩南方言辞書】 (厦門、台湾周辺)

ㄞㄇㄚˊ (阿媽) = お祖母さん、祖母¹⁵⁾。

【福建方言辞書】 (東山島周辺)

ama (阿媽) = おかあさん (呼びかけ語)、おばあさん (呼びかけ語)、祖母 (言及語)¹⁶⁾。

【潮州方言辞書】 (汕頭、潮陽周辺)

ama (阿媽) = おかあさん (呼びかけ語)、おばあさん (呼びかけ語)、祖母 (言及語)¹⁷⁾。

【浙南呉語辞書】 (蘇州、温州、上海、嘉興周辺)

阿媽 = おかあさん¹⁸⁾。

ここで注意すべきことは、広東語以外の諸地域の「ama」という言葉のほとんどが母親か祖母の意味を持つ (スペイン語と似ている) ことに対し、広東語だけがお手伝いさん (家政婦) が看護婦の意味を持つ点である。ポルトガル語とのこの一致は、何を意味しているのだろうか。

ポルトガルは、1510年、印度のゴアを占領し、ここを足がかりとしてマラッカ、香料諸島に接近し、以降、ムスリム商人を掃討しながら、東南アジア貿易の拠点をついた。かれらはまた、マラッカから北上して、1513年には広州に至り、通商を求めたが拒否され、武力衝突を繰り返しながら、1554年になってマカオの通商を許され、1557年にはここに居留地を設けた¹⁹⁾。この後、マカオはポルトガルの租界地となり、中国貿易でのポルトガルの独自の立場の足掛となる。

当時のポルトガル人居住区の周囲には中国人村が作られ、主に耕作が行われていた。マカオには元来、福建省厦門 (アモイ) からの移民が多く、「望厦」と呼ばれていたが、西洋人居住区に働いていたのは広東人であったことが分かった²⁰⁾。当時の洋館建築について、「其居率爲三層、依山高下、樓有方者、圓者、三角者、六角者、八角者。肖諸花果形者、一一不同、戶以巧麗相尚。已居樓上、而居唐人其下、不以爲嫌²¹⁾ (住宅はすべて3階建、山に寄り添う。四角、円形、三角、六角、八角それぞれであり、鮮やか、かつ個性的。寝室は上層に設け、下には、嫌うことなく唐人に泊まらせる)」との記載がある。この中の「唐人」は恐らく外国人家庭の現地家政婦を指している²²⁾。もちろん言葉の発生順番についての考察が問題として残っているが、少なくともポルトガル語の「ama」という言葉は、この時期から、雇われた広東人女性の意味を持ち始めたのではないかと考える。つまり「ama」は広東人家政婦であることを指摘しておきたい。

1517年には、キリスト教の洗礼を受けた肥前の大村純忠が長崎をポルトガル人に公式に開放した。長崎では、ポルトガル人宣教師が土地所有権を獲得するなど、ポルトガルによる拠点づくりが着々と進んだ。こうして、マラッカ、マカオ、長崎を結ぶ太い通商ルートが、この時期からポルトガルの支配のもとに確立した。一方、この広範囲にわたる華人の貿易共同体は、ポルトガル人が押し寄せてくる前には、既に確立されていた。華人たちは、代理人や取引先をこれらの貿易港に置き、その滞在者による華人社会として発展し始めていた。1841年のイギリス植民地香港の出現以後のマカオは、ポルトガルの衰退とともにさらにその位置を低下させたが、見過ごせないのは香港と並ぶ華人労働者の輸出港だったことである²³⁾。苦力と呼ばれた広東人及び福建人たちは、「契約移民」という名のもとに東南アジアや南北アメリカの欧米植民地へ、安い労働力として送り込

まれた。彼らの実態は、苦力は言われるほど多くなく、それぞれに故郷で身につけた技術をもつ自由移民が主体であった²⁴⁾。この歴史背景のもとに、広東人家政婦であった「アマ」も、短期間に東南アジア諸国に広げられたと思われる。

3. 「使用人室」及び「アマ部屋」の形態

長崎旧居留地の場合には、これら使用人が「アマ」と呼ばれたのはいつ頃のことかは不明だが、住み込んでいたのは、少なくとも当初においては日本人ではなかったことが、明治元年の「外国人支那人名前調帳²⁵⁾」により分かった(図2)。

居留地の住宅37棟²⁶⁾の中に、附属屋は取り壊されている場合や後の改築により、復元不可能な場合が多く、調査の当時においては、その室名の確認が完璧に出来ていなかったものの、東山手の明治中期の洋風住宅7棟のみ「アマ部屋」の存在を確認できた。この「アマ部

図2 外国人支那人名前調帳(『重要文化財旧オールド住宅修理工事報告書』より)

屋」が日本で成立したのか、東南アジアからもち込まれたか確かめ得ない²⁷⁾。ここでは、初期洋風住宅の「使用人室」それは「アマ部屋」かどうか明らかではないが²⁸⁾、規模を比較することで取り上げ、目的は明治中期の洋風住宅の「アマ部屋」についてである。

幕末から明治初期にかけて洋風住宅における使用人部屋の特徴として、グラバー邸及びオールド邸に見られる如く、台所と共に附属屋に設けられ、しかも多室(使用人室と名づけ)から成っている。グラフ1はグラバー邸、オールド邸及びリンガー(弟)邸の各居室及び「使用人室」の大きさの集計データであり²⁹⁾、X軸は部屋の長辺、Y軸は部屋の短辺である³⁰⁾。その分布を見ると、主屋の大きさは、 $X \geq 5103\text{mm}$ 、 $Y \geq 4650\text{mm}$ の領域に集中しているのに対して、使用人室は、 $X \leq 4545\text{mm}$ 、 $Y \leq 3939\text{mm}$ の領域に集中していることが分かる。面積で言えば³¹⁾、主屋の方が平均で $34.7\text{m}^2/\text{室}$ に対し、使用人室は、 $13.6\text{m}^2/\text{室}$ となっていた。

グラバー邸、オールド邸、リンガー邸など幕末から明治初期に建てられた住宅の附属屋と比較すると、例外があるものの、多くは主屋の背後に配置されるという点では、東山手住宅7棟も同様である³²⁾。グラフ2は住宅7棟の各居室の集計データであり³³⁾、同様にその分布は、主屋の大きさが、 $X \geq 3282\text{mm}$ 、 $Y \geq 2976\text{mm}$ の領域に集中している。これに対して、「アマ部屋」は、 $X \leq 3953\text{mm}$ 、 $Y \leq 2950\text{mm}$ の領域に集中していることが分かる。面積で言えば³⁴⁾、主屋の方が平均で $12.5\text{m}^2/\text{室}$ に対し、使用人室は、 $5.5\text{m}^2/\text{室}$ となっていた。

さらにグラフ1をグラフ2と重ねてみると、4つのグループに分けられる。A:7棟の「アマ部屋」、B:7棟の主屋、C:初期の「使用人室」、D:初期の主屋の順に広くなる。Aは、かなり小さい、Dは、かなり大

図3 初期洋風住宅3棟の居室大きさの分布(グラフ1)

図4 東山手住宅7棟の居室大きさの分布(グラフ2)

図5 居室大きさの分布比較図(グラフ3)

きい、BとCは、中間で重なっている。つまり、同じ使用人室であっても、初期洋風住宅の方は中期の洋風住宅7棟と比べて、その面積が洋風住宅7棟の主屋の居室面積を上回ることが目立っている。また、住宅7棟の内、14番住宅、15番住宅は主屋の背後に附属屋を配置するスペースがないため、主屋の1室を潰してまで、「アマ部屋」を設け、「アマ部屋」を隔離する形で廊下をまわす。狭いとは言え、主屋と対応して建て³⁵⁾、かつ、なくてはならないほどの存在感(14番、15番)も特徴的であった。

グラバー邸、オールド邸などの上流独立住宅は施主と入居者が同一

図6 初期洋風住宅3棟の居室面積(単位:m²) 図7 東山手住宅7棟の居室面積(単位:m²)

であるから、その平面構成は入居者の意向を反映している。その結果、自由な間取りの住宅が生まれ、それに部屋の大きさにも自由さがある。同居している使用人に、やや快適な住居環境を提供することも考えられる。使用人は家族の一員であることも感じ取れる。

明治中期のこの住宅7棟は、住宅の型と部屋の大きさに規格化が見られ、そこに入居者の意向は入っていないことから、賃貸住宅としての性格を有していることが指摘されている³⁰⁾。

賃貸住宅はコストを押さえ、利益を上げることに目的がある。その目的を達成するには、貸し住宅としての最低条件が揃わなければならない。先程述べたように、「アマ部屋」がなくてはならない存在であり、その存在が条件のひとつと言えるだろう。つまりなくてはならないが、貸況に造りたくない。したがって、施主、入居者、「使用人」三者の関係は、利益で結ばれて、「アマ」の立場としては、初期

には外人に雇われていたことから、中期になるとオーナー（或いは不特定のお客さん）に雇われていたことに、つまり家族の一員から第三者に、一家族の面倒を見ることから不特定のお客さんの面倒を見ることに変質してしまったのではないかと推測しうる。これは明治初期の「使用人室」と明治中期の「アマ部屋」との形態的特徴の比較をした上の推測である。

4. 広京人、福徳人の大満への進出

華人商船の長崎来航がいつ頃からであったのかについては、記録によって多少相違があるが、1635(寛永12)年に幕府が華人商船の日本渡航を長崎に限定する以前から、既に華人の長崎渡航が盛んであったことは事実である。1620年代に、南京地方出身の商人による興福寺(1620年)、福建省の泉州、漳州出身の商人による福濟寺(1628

年)、福建省の福州出身の商人による崇福寺(1629年)が建てられ、そして半世紀遅れて鉄心に篤く帰依した商人による聖福寺(1667年)が建てられ³⁷⁾、華人商人の活躍が目覚しい。1859(安政6)年の開港以来、日本に進出した欧米商社は、既に、広東、上海、香港などに根拠地を築いていた。中国との条約は結ばれていなかったが、外国商館は、中国沿岸の居留地域で接触のあった華人を買弁(Comprador)³⁸⁾として、商品の買付にあたりせたり、使用人として同伴して来ていた。こうした入国がきっかけとなって、華人の入国は放任状態となり、人数も急増している。その中に、広東系の職人や福建系の商人は大半以上を占めていた³⁹⁾。

現存している大浦在留華人全体像に関する最初の史料は、長崎県立図書館に所蔵されている1866(慶応2)年1月よりの『外国人弁支那人名前取調帳』である。まず、1866(慶応2)年1月の時点で、華人たちは大浦外国人居留地の7、9、10、13、14、16、19、21、22、23、25、26乙、28、32、33甲、33乙番地など計16件に居住していた。その中に、完全に華人たちが独占して居住していた番地は、10、13、22、23、26乙、28、33甲、33乙番地などの計8件である。その他の番地は、多数の華人と少数の欧米人とが一緒に雑居していた状態であった。大浦の他、同じ外国人居留地の東山手10番地、南山手11番地乙、南山手16番地甲、及び出島の4番地にも居住していた。この数ヶ所を除けば、華人の外国人居留地への進出は大浦に集中し、しかもほとんど大浦の大浦川東側の部分に限られていた。この地域において、1862年から1870年の間に、華人が進出していなかった場所は、大浦の5、11、24、27甲、31番地などのわずか5件だけであった⁴⁰⁾。色分けをすると、図8の通りに示されている。この時点では、外国人居留地の在留華人人数はすでに欧米人を上回って、特に大浦において最も著しかった。明治4年の日清修好通商条約の締結によって、華人の大浦居留地への進出はさらに増え、こうした状況変化によって、1893(明治26)年大浦32番で華人の信仰の対象とする孔子廟が出来、やがてここに華人子弟の時中小学校が併設された⁴¹⁾。この頃になると、大浦は長崎の外国人居留地よりむしろ広東、福建人を中心とした華人居留地であった事実を思わせる。

5. 建設者及び所有者の推定

1867(慶応3)年に上海で発行された“LIST OF FOREIGN HONGS AND RESIDENTS”⁴²⁾によると、南山手にはグラバー商會が借地している敷

図8 大浦外国人居留地の華人居住分布図
(敷地番号は「長崎居留場全圖」⁴³⁾による)

地が8ヶ所あり、それぞれにprivate residenceが建っていたことが分かる。これらの住宅はグラバー商會に勤務する人々の社宅であった可能性も考えられる。しかしこれらの住宅は独立住宅であるのに対し東山手7棟はどちらかといえば貧弱な住宅である。これらの住宅が建てられた明治20年代後半は、長崎の対外貿易が減退をし始める時期であり、日本全体の中で占める長崎対外貿易の比重が、ここを境としてだんだんと横浜、神戸へ移っていき、長崎の商館も閉館されていく。東山手の7棟を社宅として建てる外国の企業が存在した可能性は小さい。よって東山手住宅7棟が賃貸住宅であると推定しえた⁴⁴⁾。今回鹿児島大学教授前田滋先生提供の写真と家系図を基にその性格を明らかにできた。

1898(明治31)年頃、新婚夫妻(夫ゼ・エフ・エ・デローイ 51歳、妻松田ナカ 21歳)が7棟の一軒を借り、1900(明治33)年から1911(明治44)年までに5人の子供が生まれ、1921(大正10)年に夫が亡くなり、その後も親子は住み、昭和5年頃まで、13番住宅(番号は昭和51年の調査の時付けた番号)に住んでいたことを確かめ得た(写真1、図9)⁴⁵⁾。このことによって住宅7棟が外国人向けの賃貸

写真1 1920年代の13番住宅(左:松田孝義、右:松田ヨカ)
(前田滋先生提供)

アントニウス・
ルクレテウス・デローイ
||
ベトロネラ
アントニウス・デローイ

ゼ・エフ・エ・デローイ (1847 ~ 1921)
||
松田ナカ (1878 ~ 1959)

* 松田孝義 (1909.2.10 ~)
||
吉尾ツル
||
松田有義 (1907.11.28 ~ 1974)
||
永瀬忍 (? ~ 1977)
||
松田芳子 (1904 ~ 1916?)
||
松田数与 (1902.10.16 ~ 1961)
||
田中頼子 (1912 ~)
||
* 松田ヨカ (1900.8.10 ~ 1964)
||
前田正国 (? ~ 1987)

図9 ゼ・エフ・エ・デローイ氏家系図
(前田滋先生提供)

写真2
東山手12番住宅の正面欄間、唐草模様の装飾

写真3
東山手13番住宅の正面欄間、唐草模様の装飾、真中にぶら下がったのは中国風（典型的）の木作垂蓮頭である

写真4
東山手13番住宅の側面欄間、唐草模様の装飾

写真5
東山手15番住宅の内側面欄間、唐草模様の装飾

住宅として建てられ、住宅の性格を明らかにし得たと考えている。一方では、「7棟の歴史については、知っている人が少なく、わずかに6番（14番一筆者注）の住宅に住む藤原清一氏の証言をもとにして知るのみであった。それによると、当初7棟を建設したのは片岡で、西洋人向けに日本人大工をつかって建てている」とのヒアリング結果により、7棟の建築主は、片岡兄弟ではないかとの定説⁴⁾がある。しかし、今までの研究によれば、住宅7棟の内に少なくとも2棟が、313mm強/尺の物差を使用したことを確認しえた⁴⁾。仮に日本人大工によって建てられたとすると、313mm強/尺の物差を使うはずはない。よってこのヒアリングの信頼性がまず疑われる。100年の歴史を持つこれらの住宅においては、その建設主及び所有者の推移の判定は決して簡単ではない。もちろん長い歳月に亘って、片岡兄弟が7棟を一時所有したかもしれないものの、崖を削って山の上に一気に唐風彫刻付⁴⁾（写真2～5）の7棟住宅を建設し、外国人相手の不動産業を営もうとする商才を持っている人は、誰なのかは興味深い。ここでは主屋と「アマ部屋」とが共に存在し、時には主屋の中に入り込み、密接に関係していたことを指摘しておきたい。

6. 最後に

今までに、「アマ」の語源を溯りながら、「アマ部屋」の特徴および華人（広東人、福建人）の大浦への進出実態について検討した。要約をまとめると共に、史的位置付けを指摘する。

①広東人家政婦であった「アマ」は、ポルトガルのマカオ入植期に誕生し、華人労働者の海外輸出と共に、東南アジア諸国に広げられ、やがて日本に辿り着いたことを指摘し得た。

②明治初期の「使用人室」と較べて、中期7棟の「アマ部屋」の広さは、非常に狭いとはいえ、無くてはならない存在が貸し住宅の条件のひとつとして考えられる。

③東山手住宅7棟が賃貸住宅であることが明らかにされた。

④賃貸住宅、「アマ（広東人家政婦）部屋」、それに広東人、福建人を中心とした華人の進出といった様相が明治中期の長崎大浦外国人居留地に出現していること、それは偶然であろうか、三点を結びつく因果関係を記す資料をまだ見つけていないけれども、華人と「アマ部屋」とのつながり、賃貸住宅と「アマ部屋」との併存から、因果関係、つまり華人と賃貸住宅の関係を推定し得るのである。

いままでの研究では、華人の長崎への進出についてよく触れてはいるが、それを裏付ける一つの遺構として東山手住宅7棟の存在は、重要な意味を持つに違いない。調査の対象となる洋風住宅の数が限られていることもあって、これらの「アマ部屋」の建築的な特徴がそのまま当時の居留地における洋風住宅の傾向を示しているとは限らないが、たとえ、華人の活躍が東山手洋風住宅7棟にのみ見られた特殊な例であるにしても、この事実は居留地における洋風住宅の史的研究の上で、重要な位置を占めていることは、言うまでもないであろう。

謝 辞

本研究をまとめるに際し、（株）佐藤総合計画常務元吉悠次氏をはじめ、九州事務所の方々には、多大のご協力を頂きました。また長崎活水女子短期大学教授宮本達夫先生、鹿児島大学教授前田滋先生にご教示を頂きました。ここに記して感謝の意を表します。

注

- 1) 堀越三郎『明治初期の洋風建築』（1929年）、稲垣栄三『日本の近代建築——その成立過程』（1959年）、木村徳国『日本近代都市独立住宅様式の成立と展開に関する研究』（1959年）、村松貞次郎『日本建築近代化過程の技術史的研究』（1961年）、桐敷真次郎『明治前期建築における洋風技法の研究』（1961年）、菊池重郎『日本における洋式建築の初期導入過程の研究』（1961年）、近藤豊『明治初期の擬洋風建築の研究』（1961年）山口光臣『日本における洋式建築導入過程の研究』（1969年）などがある。
- 2) 伊藤三千雄『外国人居留地域とその建築に関する研究』（1975年）、坂本勝比古『外国人居留地建築の研究』（1966年）などがある。
- 3) 東山手地域と南山手地域の建造物については、昭和51年7月から11月中旬にかけて3回に分けて、九州大学工学部建築学教室によって調査が行われた。実測棟数（教会、事務所、住宅などを含む）は、東山手地域には15棟、南山手地域には37棟、合計で52棟にものぼった。長崎市教育委員会『東山手の洋館』（長崎市教育委員会 1977年）、長崎市教育委員会『南山手の洋館』（長崎市教育委員会 1977年）を参照。

- 4) 宮本達夫、土田充義「長崎旧居留地東山手に建つ明治中期の洋風住宅について」（『日本建築学会計画系論文報告集』第354号 1985年）。
- 5) 前掲3）『東山手の洋館』pp.43を参照。
- 6) 謝少明、土田充義「長崎旧居留地に建つ明治中期の洋風住宅について——東山手の9番、10番住宅の設計寸法を中心に」（『日本建築学会計画系論文集』第522号 1999年）。いままでの研究では、華人の長崎への進出について触れてはいるが、それを裏付ける実例として取り上げたものはまだ見受けられない。詳しいことは、前掲2）伊藤三千雄、黄俊銘『東南アジア及び日本における華人町の形成史に関する研究』（東京大学学位論文 1990年）、藤森照信『日本の近代建築（上）——幕末・明治篇一』（岩波書店 1993年）などを参照。
- 7) 山口光臣『長崎の洋風建築』（長崎市教育委員会 pp.77、1967年）を参照。1868（明治元）年調製の着色地図「Plan of Decima Nagasaki」1st november 1868（長崎大学経済学部武藤文庫蔵）の右下に描かれた星形に付された英字の説明によって、当時の建築構造形式が区別でき（それ以降の諸図も同系統）、赤色はOut Houseとあるが、通常、「附属屋」と呼ばれている。その他、長崎市

- 教育委員会『長崎古写真集一居留地篇』(長崎市教育委員会 pp.134～135 1995年)をも参照。
- 8)井上洋子他3名「長崎市における洋風住宅遺構の研究(その3)一住生活に関する一考察(付属屋について)」(『日本建築学会九州支部研究報告』第23号 1978年)。また、浜崎国男『長崎異人街誌』(葦書房 pp.245 1978年)に「このアマーというのは、今日でいう、“お手伝い”とか“乳母”または“家政婦”などに類するもので、これは通勤のものもあったが、多くは住込みであった」と述べている。
- 9)James L.Taylor, *A Portuguese - English Dictionary* (Stanford University Press Stanford, California, pp.39, 1975)。
- 10)ピセンテ・ゴンザレス O.P. 一色忠良『西和辞典』(Editorial Enderle Book Co., Ltd. Tokyo, pp.78, 1986)。
- 11)小学館ランダムハウス英和大辞典第2版編集委員会『ランダムハウス英和大辞典』(小学館 pp.84, 1994年)。
- 12)武富正一『馬來語大辞典』(旺文社 pp.26, 1943年)。
- 13)金田一春彦、池田弥三郎『学研 国語大辞典(第二版)』(学習研究社 pp.47, 1998年)。また、日本語の海女、尼僧の発音も同様。
- 14)中島幹起『現代広東語辞典』(大学書林 pp.3, 1994年)。
- 15)台湾総督府『台湾語大辞典 上巻』(国書刊行会 pp.28, 1983年)。
- 16)中島幹起『福建漢語基礎語彙集』(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 pp.168, 1979年)。
- 17)前掲16)。
- 18)中島幹起『浙南呉語基礎語彙集』(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 pp.653, 1983年)。
- 19)堀田光義の他5名『中国近代史 上巻』(東京大学出版会 pp.17, 1982年)。
- 20)藤森照信、汪坦『全調査東アジア近代の都市と建築』(大成建設株式会社 pp.426, 1996年)。
- 21)[清] 屈大鈞『広東新語(上)』(中華書局 pp.33, 1985年)を参照。
- 22)1637年にマカオを訪れたピーター・ムンデューは、カピタン・モールであったアントニオ・オリヴェイラ・アラニャの邸宅に迎えられた際、華人女性の侍女らの接待を受けたことが記録の中に記されている。東光博英『マカオの歴史—南蛮の光と影』(大修書店 pp.81, 1998年)を参照。
- 23)華人移民の最大のうねりは十九世紀後半にはじまり、1848年から1888年のあいだに二百万人以上が故郷を後にして、マレー半島、インドシナ、スマトラ、ジャワ、フィリピン、ハワイ、西インド諸島、カリフォルニア、オーストラリアへ渡った。Wang Sing - wu, *The Organisation of Chinese Emigration 1848 - 88* (Chinese Materials Center Inc., San Francisco, 1978)、リン・パン著、片柳和子訳『華人の歴史』(みすず書房 pp.50, 1995年)。
- 24)J・K・フェアバンク著、大谷敏夫、太田秀夫訳『中国の歴史—古代から現代まで』(ミネルヴァ書房 pp.258, 1996年)を参照。
- 25)1867(慶応3)年にはオルトが借地しており、この頃建物も完成したものと見られ、明治元年には英オルト、同妻、娘二人、使用人(支那人老人)の計五人が住んでいたようである。『重要文化財旧オルト住宅修理工事報告書』(長崎市 pp.9, 1979年)を参照。
- 26)実測対象となっていた52棟のうち、住宅の棟数は、東山手地域には11棟、南山手地域には26棟、合計で37棟にのぼった。
- 27)1940年代頃、モダニスト建築家、前川国男氏が設計した上海華興商業銀行社宅には、独立した「阿媽室」を設けていたことは非常に興味深い。恐らく何らかの影響を受け、プランニングしたのではないかと予想される。村松伸『上海・都市と建築 1842～1949年』(PARCO 出版局 pp.341～342 1991年)を参照。
- 28)初期洋風住宅の「使用人室」が「アマ部屋」と呼ばれたかどうかについては、確認できないため、ここは部屋の大きさの比較で取り上げたまでである。
- 29)データは、修理工事報告書の復元図によるものである。リンガー(弟)邸の付属屋は改築により、復元不可能なので、それを除いて主屋のみ検討の対象とした。
- 30)いずれも柱(或いは壁)の真直の計算値(規則でない居室は、平均値で計算する)。
- 31)部屋の内法の寸法値。
- 32)「アマ部屋」の現状及び意匠の特徴について、外壁は主屋と同じく下見板張で、窓も鍍戸付きの両開きであるため外観は洋風であるが、「アマ部屋」は畳となっている。また屋根の形式は主屋が寄棟であるのに対して、付属屋は切妻である。厨房や浴室など水を使用する個所の腰壁及び煙突は煉瓦造である。調査の結果、各付属屋は厨房、「アマ部屋」、浴室、便所、物置で構成され、9番、10番、12番住宅はそれぞれが別棟で、1組ずつあり、他の4棟は1組しかないことが分かった。このことから9番、10番、12番住宅が2世帯用の住宅で、11番、13番、14番、15番住宅が1世帯用の住宅であることが分かった。詳しいことは、前掲4)を参照。
- 33)データは、実測によるものである。
- 34)同じく部屋の内法の寸法値である。
- 35)部屋数を数えると、主居室数対「アマ部屋」室数の比は、12番住宅が4対2(2:1)、13番住宅が4対1、14番住宅が3対1となっていて、平屋においては比率が高い。
- 36)前掲4)を参照。
- 37)福田忠昭『長崎市史・地誌編仏寺部・下』(長崎市役所 1981年復刻)の第7章第1節東明山興福寺、第2節分紫山福濟寺、第3節聖寿山崇福寺、第4節万寿山聖福寺などを参照。
- 38)ヨーロッパ諸国の中国貿易史上重要なコンブラドル「買弁(ばいべん)」(ヨーロッパ人と華人の商人の間で商取引の仲介を務めた華人)制度がマカオで生まれたとの指摘がある。セザール・ギーエン・ヌーニェス著、西村幸夫監修、西山宗雄、泉田英雄訳『マカオの歩み』(学芸出版社 pp.27, 1993年)を参照。
- 39)前掲2) 伊藤三千雄 pp.303を参照。
- 40)前掲6) 黄俊銘 pp.187、菱谷武平『長崎外国人居留地の研究』(九州大学出版会 pp.768, 1988年)などを参照。
- 41)前掲40) 菱谷武平 pp.726を参照。
- 42)「長崎居留場全圖(慶応2年)」(立正大学図書館中啓衛文庫所蔵)。
- 43)長崎大学附属図書館経済学部分館所蔵。
- 44)宮本達夫、土田充義、前川道郎「長崎旧居留地東山手の住宅7棟に関する研究」(『九大工学集報』第58巻 第4号 pp.525～532, 1985年)及び前掲4)を参照。
- 45)鹿児島大学教授前田滋先生の御示教によれば、ゼ・エフ・エ・デロイ氏はオランダ人で、理事官としてインドネシアに駐在し、晩年日本に移住したとのことである。
- 46)村田明久「東山手に残る7棟の洋風住宅群について」(『長崎総合科学大学紀要 第21巻 第2号』長崎総合科学大学紀要刊行委員会 1980年)。
- 47)前掲6) 謝少明、土田充義。
- 48)住宅7棟のうち、9番、10番の欄間にガラリが設けられている。11番の二階ベランダの柱間には唐草模様、菱格子などの欄間がある。12番のベランダの柱間には唐草模様の装飾を用いている。13番、15番のベランダの柱間には同じく唐草模様の装飾を彫っており、真中にぶら下がったのは中国風(典型的)の木作垂蓮頭である(注図1、2参照)。劉敦楨主編『中国古代建築史』(中国建築工業出版社 1984年)、中国科学院自然科学史研究所主編『中国古代建築技術史』(科学出版社 1985年)、梁思成『清式營造則例』(中国建築工業出版社 1981年)及び井慶昇『清式大木作操作工芸』(文物出版社 1985年)などを参照。

注図1 中国風木作垂蓮頭の標準図
(『清式大木作操作工芸』より)

注図2 垂蓮門標準図
(『清式營造則例』より)

(1999年8月2日原稿受理, 2000年1月28日採用決定)